

第 10 回定例教育委員会 会議録

開催月日 令和2年10月22日（木）

開催時間 午後 2 時 00 分から午後 3 時 16 分まで

開催場所 教育委員会室

出席委員 教育長 齊木 邦彦
教育長職務代理者 三塚 憲二
教育長職務代理者 佐藤 喜美子
委員 松坂 浩志、岡部 和子、小澤 幸子

出席職員 教 育 次 長 小林 厚
教 育 監 嶋崎 修
教 育 監 井上 耕史
理 事 降旗 友宏
次長（総務課長） 小田切三男
義務教育課長 中 込 司
高校教育課長 荻野 智夫
高校改革・特別支援教育課 百瀬 友輝
生涯学習課長 山岸 ゆり
総務課総括課長補佐 土橋 信也
総務課課長補佐 入倉 俊幸
総務課副主幹 河野 奈美

総 務 課
主 任 石原 汐璃
高 校 教 育 課
主幹・管理主事 小林 太郎
高校改革・特別支援教育課
課長補佐 菊島 圭一
副主査 杉山 賢司
生涯学習課
総括課長補佐 望月 勝一

傍聴人 1 名

報道 1 名

会議要旨

〔 教育長開会宣言 〕

議案第23号、24号及び報告事項7については個人情報に関する案件である旨が教育長から発言され、出席委員全員が了承のうえ非公開とした。

- 1 議 案
第 23 号 山梨県社会教育委員の委嘱・任命について
〔説明〕生涯学習課
（ 非公開 ）

【原案どおり決定】

- 第 24 号 山梨県図書館協議会委員の委嘱・任命について
〔説明〕生涯学習課
（ 非公開 ）

【原案どおり決定】

2 報告事項

(7) 令和2年度山梨県教育功労者表彰について

[説明] 総務課

(非公開)

【 了 知 】

3 その他報告

(9) 令和元年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」結果につ

[説明] 義務教育課、高校教育課

三塚 委員

数値的なことはよく分かったんですけども。家庭教育について余り踏み込んでいないですよ、これを見ていくと、どうしようとか。と言うのは、今年度は通年と同じようなことで来ていると思うんですけども。これが今年度になってくるとコロナの影響でもっと増えているわけで、その辺を踏まえて考えていくと、やっぱり考察の部分で、それは元年度のことに限らず、これが将来的にこうなるんだということを踏まえた上で、そうするとやっぱり考察のところで考えなきゃいけないのは、学校教育についてはある程度出てきているけど、家庭教育をどうしていくのかと、踏み込んだことが全く確認が入っていないじゃないですか。やっぱりこれからは学校教育と家庭教育が連動してやっていかないと、これからの子どもたち、こういう状況下の中では非常に難しくなってくると思うので、やっぱり家庭教育をどうするかという所まで踏み込んだ考察を加えていただいたほうがいいんじゃないかなと僕自身は思ったんですけどね。

中込 課長

小中、特に家庭教育というのは重要だと思っていまして、先生のご指摘どおりだと思っております。ここの分析の中ではなかなか触れていない部分もありますけれども、こんなコロナ禍の状況においてやはり家庭との問題、結び付きの上で非常に重要だと思っております。現在の状況を申し上げますと、不登校についてはお休みの部分もありますので若干減少している。傾向だけしかまだ捉えておりませんが、先生ご指摘のとおり家庭との繋がりとことでは、特に福祉面という面でスクールソーシャルワーカーということで家庭とも繋がったり、町の福祉部局と繋がれるというふうな役職のものも付けておりますので、先生のご指摘のとおり状況をまず把握するということと、合わせてその辺の対応を学校にも十分にするというように、今後指導していきたいというふうに思っております。

三塚 委員

いつも思うんですけども、こういったデータを出していただくじゃないですか。確かにしっかりとしたデータは出てきているんですよ。でもね、あくまで出してきているだけで、毎回毎回僕思って言っているんですけども、もうちょっと踏み込んで、どうしたらいいかということはどういうふうにと踏み込んで考察を加えるべきじゃないかなと。それがやっぱりこれからの教育方針に反映してくるわけだから、そういったことをやっぱり今中込さんが言ったように、こういうふうにいるんだ、こういうふうになりたいと。なんでそこまで踏み込んで書かないのと思った。踏み込んで書くべきだと僕は思っている。やっぱりその辺のところをちょっと在り方を考えたほうがいいんじゃないのかな、そろそろ。こういった時代が変わってきているから、と思います。

岡部 委員

アンケート項目は毎年一緒だと思うんですが、一緒なのかどうかということを知りたいということ。それから教師に相談したものの数が入っているのかどうか。アンケートだけの結果なのか。そして教師自身が自分で発見したり、あるいは相談に乗ってきたものがどうなっているのかということを知りたいということです。恐らくこういうようなことというのは、いじめもそうなんですけど、不登校担当もいると思うんです。

岡部委員

不登校担当の勉強会というか、研修会が何回ぐらい行われているのかということも教えていただきたいと思います。小学校1年生は本当に不登校になる子もいるかと思うんですけども、やはり幼稚園から上がった、今回の幼稚園センターを作られた所でやっぱり小学校1年生がスムーズに上がれるようにということもあるかと思うんですが、来年はこれがなくなるようなことを期待しながら、今話をさせていただいた教師へのというところで、やはり広報活動をやっぱり校長先生はやるべきだと思います。例えば相談する所はスクールワーカーが何日にきますよ、何曜日にきますよ。それから自分たちの相談の青少年相談は市役所のこういう所でやっていますよ。電話番号でもたびたび書いて、やっぱり広報活動をして救ってやらないといけないと思うので、その今のところのアンケート項目のことについて教えてください。

中込課長

アンケート項目につきましては例年変わらない、同じような項目で取っているということでございます。特に発見等、その辺のきっかけとしましては8ページに義務のほうはちょっとあるんですけども、発見のきっかけという所でアンケート項目、先ほどのアンケート項目で幾つかありまして、上の(5)発見のきっかけのところ、8ページですが、全国が58.4パーセントに対して75.7ということで、いわゆるアンケート項目、アンケートを実施しているということ、その発見のきっかけになっているというふうには捉えています。先生がおっしゃられた本人からの訴えですとか、担任が発見というところで、そういうところではもう少し先生おっしゃるようなところで、教員がいろいろな所を見る目を研修でやっていく必要があるということ、そういう点で不登校担当ということも含めてですが、不登校の市町村の担当者会という形で年間3回やっております。それと合わせて、いわゆる学校の生徒指導主事ということで、小中合わせての回数が2回。それぞれ分かれた回数で、分かれたところでも中学校については少し小学校より多く会議を持ちながら、不登校ですとか、様々な対応をするようにということで会議を持っているところでございます。最後は小1のところですけども、小学校1年生、なかなかじめないということもありますので、スタートカリキュラムということで、まず小学校に入ったところでカリキュラムとしまして、今日から座ってこの勉強をしますよというところではなくて、そういうところもちろん必要なんですけれども、それだけではなく幼稚園、保育園からの繋がり、こんなふうな学習を、こんなふうな工夫をしてやりましょうというようなことをカリキュラムに盛り込むようにということで、小学校のほうにも指導している段階でございます。

岡部委員

ありがとうございました。
小学校の先生は非常に丁寧で、アンケート取る時にご自分が読んで、子どもたちに納得。ただ単にするんじゃないで、すごく丁寧にアンケート調査を取っているということだけご報告します。
以上、ありがとうございます。

荻野課長

高等学校もアンケートについては先ほどの義務と同じであります。もちろん生徒本人の訴えとか、担任の発見とか、そういう数も入っております。それから教員の研修ですが、18ページの(6)に示してございますが、生徒指導主事を対象とした生徒指導主事連絡協議会の中で研修、これが大体6回。それから教育相談担当者を対象とした教育相談連絡会議というものを年3回等行いながら、いじめ、不登校問題について担当者への研修、啓蒙等を行っています。

岡部委員

ありがとうございました。

小澤委員

23ページに、「学校に登校する」という結果のみを目標にするのではなく・・・という記載にはちょっと希望を見出したいと思っているんですけども。その中で、一人一人の可能性を伸ばせるように学校外の学びの場の整備、充実も図っていききたいと、そういう発想は素晴らしいと思うんですけども。

- 小澤委員 コロナ禍でオンラインの授業などもされるようになったと聞いています。本県の状況が分からないんですけど、それによって学校の学びの場に不登校の子どもさんがアクセスできるようになったという、コロナ禍において数少ないよい点があったというふうな報告も聞いたことがあるんですが、本県についてはそのことについて何か把握されている事案があるのでしょうか。
- 中込課長 小中につきましてはGIGAスクールということで、一人一台端末を今進めている状況で、それが本年度中にはというふうなことで今計画を立てておりまして、その一人一台端末を使って、なかなか学校に来れない子どもに対しての指導を行うというふうな手段が非常に有効だと思っておりますので、その方向性で今考えているというところです。
- 降籬理事 不登校期間で、不登校期間という臨時休業期間が長かったものですから、毎日通わなくて分散登校などをする時期があった時に、結局その不登校の児童生徒さんが学校に少し来れたというような状況もありまして、その際に不登校の生徒さんが教室と別室でオンラインを、本来の映像を使って授業に参加をしたというような事例がこの県内にあったというのが数例あると承知しています。なので、家と学校を繋いだ不登校へのアプローチという、先ほど義務教育課長からご説明したとおりののですが、本県でもこのICTを使って、この学校の中でも教室には行けないんだけど別室で授業を受けられるような、そういったものが広がっている状況です。
- 小澤委員 ありがとうございます。
学びの場が多様であることは非常に重要だと思っておりますので、今後に期待したいと思います。ありがとうございます。
- 佐藤委員 お願いします。
先ほどの8ページの発見のきっかけというところなんですけれど。昨年も発言させてもらったような気がするんですけど。担任の発見の件数が少ないということで、先生方も小学校の場合特に教室の中に一日一緒に生活をしている中で、もう少し子どもたちの様子が見られるような先生方にゆとりがあれば、きっと発見ももっとできるんだろうなというふうに感じるわけですけども。そういうふうな体制についても力を入れていただきたいと思えますし。認知件数が全体として増えているということは、ある意味評価できることというふうに思うんですけども。重たい案件と、まあちょっとしたからかいというような、そういう案件が何か混沌として、大事なものを見失ってはいけないなというふうに思っていますので、アンケートを取ったあとの、そのすぐ担任と管理職が重大な案件について見逃さないように、そのこのところは意識を高く持っていただきたいというふうに思いました。今年の指導重点にもあります、学級づくり、学級経営をベースにということを、かなり県も声を大にして言っていますので、各学校でそのことにもう一度力を入れていただけると指導していただきたいというふうに思いました。
- 中込課長 本県の指導重点の中で学習ですとか、生活ですとか、それを全部基盤とするところで学級づくりをまずしていきましようということで、今学校のほうにもお願いをしているところでございます。そういうところが定着することで、ご指摘のありました担任が発見というところも向上していくことができるというふうに思っていますし、なかなか重い案件も中には出てきますので、そういう場面に、特に不登校の関係で重い案件については、今年度総合教育センターにチーフカウンセラーということで、各市町村の不登校教育支援センターを回ったり、その中でなかなか解決が難しい案件に対してのカウンセリングをしているというふうな状況で、今対応しているところでございます。

松坂委員

今いろいろこの調査結果とかを聞いたんですけども、全体的にはこの調査結果を踏まえて取り組みが正しく行われているかどうかというのはどういうふうに認識しているんでしょうか。今までいろんな取り組みをやって、特段その全体数だと暴力行為とかって減っているように思えるんですけど、例えばほとんど見ていると右肩上がりになっていまして、それについていろんな取り組み、こう実際にやっていますというのを結構こんな形でもって取り組んでいるよとか。それが効果ができているのかなという認識はどんなふうに捉えているのかなというのがちょっとお聞きしたくて。その認識がそれでもってよければ数値が下がってくる結果に繋がってくるんです。そうすると数値が、結果が繋がらなかったら、すぐこの行動を変えてみるとかというふうにしなないと何かいけないのか。それとも、これ時代と共に自然と、対策しているんだけども増えてくる数字だと認識しているのか。それとも対策を打つことによって、ここで抑えられているのか。そうじゃなくて、対策がずれているからこういうふうになっているのかという、この辺の認識がかなり捉え方によって今後の対策も変わってくると思うんです。でも実効上は調査をするということは、ある目標に対して必ず成果が現れないと、まあ間違った対応かなというのも認識しないといけないかなというふうにちょっと思っていて、全体的に見るとこの暴力行為も全体数で見ると下がっています。だけどそれが今度は小学校のほうに移っています。じゃあ小学校の、その移っている対応はこういう対応をしないといけないとなって、全体的に今度は来年になった時にその対応結果に対して、これはうまくいきましたねとか、○とか。これちょっとずれていたかなと、×とかというふうな、何かこういう自己評価みたいな形に進まない、なかなかやっていることはたくさんやっています、にならないかなというのちょっとそんなふうなことを思うので、その辺どう考えていますかというのをちょっと・・・、どうなんですか。

中込課長

おっしゃるようにならぬようにどういふふうにならぬかというところは大変重要な点だと思っております。幾つかあるんですが、小学校についても暴力行為が増えているという。ここは先ほど申し上げた、なかなかコミュニケーションがうまく取れない子どもたちが増えているということはあると思うんですけども。さらに状況としましては、いわゆる特別支援の特別な支援が必要な子どもたちが若干増えていまして、その子どもたちが繰り返すなかなか連携取れないということが結果として出ているなということをおっしゃって、その点についての対応としましては、まず保護者ですとか、関係機関等連携して、どんな対応が一番いいのかというところを専門的な知識を入れながらということでお考えしています。いろいろなところがあります。あと、いじめについては、こちらは先ほどお話ししたように、まず認識をしましょうということ、現在増えて右肩上がりということで、元々全体を減らしていくというのが本来ではあると思うんですけども、まず認識をしていきたいと思いますという、国の機関の調査によりまして大体25パーセント程度が、何らかの嫌なことを言われるとか、そういうことがあるというふうなことが調査として経年的にありまして、本県の場合には12パーセントぐらいの子どもたちが意識を持っていじめの認識をしているという、いじめられたという認識をしていますので、そういう点ではまだ隠れた部分ではあるかもしれないということで、まず認識をした上で早期対応、早期発見をしていきたいと思いますということをお考えしております。不登校につきましては、これはもう減らしていきたいということをお考えしているんですが、先ほど小澤委員のおっしゃいましたような多様なところもというふうなことで、文科のほうでも指摘がある状況でございますけれども、まずは我々として学校へということをお考えしていきたいということをお考えしております。全体的な対応としまして、どれがどの対応ということはなかなか申し上げられないということなんですけれども、不登校についてはもう少し減らしていかなければならないということをお考えしているわけなんですけれども。大きいそれぞれの問題に対して、まず未然防止が必要だということ。あと早期発見と早期適切な対応が必要だということ、県内の学校でも共通認識を持って対応しているということでございます。学校内での管理職の指導の下、担任ですとか、養護教員と連携を取りながら、学校体制で取り組んで行くということが基本ですけども、県としましては先ほど申し上げたクラスづくりということが一つありまして、あとスクールカウンセラーの全校配置ということと、先ほど申し上げたチーフスクールカウンセラーをセンターに配置ということ、対応を取りながらやっています。不登校については当然減らしていくということをお考えしているところでございます。

松坂委員

いろんな対応をやっているのは十分分かるので、まず自己評価が必要じゃないでしょうかというのが実は私が言いたいことなんです。自己評価として、外部評価としてそれがいいかどうかということはまた別問題として、自分たちが計画をしたものに対して行き着いたかどうか。行き着かないと軌道修正しながら、今年の段階では認知をしました。それから認知件数はこれである程度十分認知できたんです。いよいよ、じゃ来年からこの認知に対して実効上の今度対策を、今言われたようなことをやることでもって、必ずこれが下がるんですというふうな内容が言い切れるのかどうか。また、上がっていくことが自然に今の時代で上がってくる問題も捉えているんです。だけどそういうことをやっていることによって、これが抑えられましたというのも一つの成果かもしれないので、なかなかそういうふうな、何か実効をやるどころと目標値みたいなのと、自己評価みたいなことが報告されると、そうですね、まあこんな考え方も考えてみたらどうでしょうかというふうな議論にちょっとできると思うんですけど。だから今そういうふうな自己評価みたいなものも目標、目標設定と言うんでしょうかね。その目標に対して自己評価としてどうだったか、とかいうようなことが議論されるようにしてもらいたいなというのが、ちょっとそんなふうなことを是非考えていただきたいと思うんですけど。よろしくお願いします。

教育長

最初の三塚委員さんのご意見にも通ずるところがございまして、そしてまた皆さんの意見からもそういうふうなご意見を感じとるわけですけれども。事務局にお願いなんですけれども、一生懸命施策をやって、そしてこういう数値が、まあ数値は一つの数値に過ぎないのかもしれないけれども、そういう数値が出ていますということを、今まで自分たちの施策の一つ一つと付き合わせて、じゃあここをこう変えればもっとうまくいくんじゃないかとか、あるいはこのところはこれまでのところをこういうふうには評価するけれども、今後はこういうふうにしていこうとか。ちょっとうまく形が、どんな形になるか分かりませんが、また改めて評価をしてもらえればというふうに思います。

松坂委員

一応参考に、例えばグラフをやると必ず管理限界を決めないといけないんですよね。例えばこれを超えたらアラームが鳴るとか、そういうふうな管理限界を決めておくというふうなことも必要で、このまま管理限界がないとどんどんどんどん結果は増えていきました。そして去年はこういうことをやったけど、こんなに落ちました。それは把握できなかったのかという問題がその時に出てくると思うんです。だから必ず何かアラームが鳴る仕組みを作っておかないと、放っておくとアラームが鳴らないでどんどんどんどん増えて、来年もまた同じ結果でもって、いやこんなに増えましたという話にならないような、何か事前対応というようなこともちょっと必要なというふうな、そんなふうなことをちょっと、このグラフを見ると、グラフを単純に考えるとそういった管理限界とか、そういったメーターで考えるとアラームが鳴る仕組みをどこかに作る必要があるかななんてちょっと思いますので、よろしくお願いします。

【 了 知 】

- (10) 令和2年度中学校卒業予定者の第1次進路希望調査結果の概要について
〔説明〕 高校改革・特別支援教育課

- 三塚委員 さっきの続きみたいな話になっちゃうんだけど。これを見て、要は各高校で格差があるわけじゃないですか、要するに魅力があるところとないところ。教育委員会としては、例えばその魅力のない高校に対してはどのような指導をしていくべきかかというところまで考えないのか。多分、これ見てまた第二次希望者の調査をするということになるわけでしょう。そうすると各中学校でこれを見て、まあここは倍数少ないからあなたここに行きなさいよとかと、その子の学力に合わせてやってきたわけで、実はそれではその高校の魅力がない高校は最初から人気がないんだけど、最終的にそこをうまく事象を見直してこうやっちゃうから、そうすると全然その格差というのは本当の格差は全く解消されないじゃない、本来から言う。だから本当の格差を解消するためには、魅力のない高校にはどういうふうに教育委員会が指導して、あなたこういう魅力がないから、こういうことを考えたほうがいいですよとかという、そこまで踏み込んだ指導というのは教育委員会はやらないの。
- 百瀬課長 指導、いろんな指導の仕方があると思いますけども、各学校でそれぞれいろんな場面で取り組みをしていると考えております。生徒指導であったり、部活動、授業もそうだと思いますけれども、いろんな場面でいろんな方面から各高校にはそれぞれ魅力あると言うんですかね、生徒に来てもらえるような学校にしてもらえるように努力していただいているところなんですけども。なかなかそれが結果に結び付いていないというところもありますので、なかなか難しいんですが・・・。
- 三塚委員 苦しい答弁でよく分かるけども、立場上ね。前から僕思ってたんだけど、このあとまた調査すると少し山がボコボコがなくなってくるじゃない。それでよしとしちゃう部分があるんだよね、僕らが見て。そうじゃないんだよなということで、やっぱり元々の魅力がないところは魅力がないんだから、もうちょっと踏み込んで教育委員会でもっと魅力のある高校にしなさいよと。あなたこういうところ、あなたの高校、まあ校長が考えることだからって言ってしまえばお終いになっちゃう話なんだけど、教育委員会としてやっぱり魅力のある高校にこういうふうに変えて行きなさいよというか、指導を僕はすべきじゃ、もうそうしなきゃいけないんじゃないのかなと思う。やっぱり山をこのあと中学校の先生方が山をつぶしていくだけの話だから、それでよしとしているんじゃないの、変な言い方だけど。それはない・・・。
- 百瀬課長 この調査の目的が元々そういう進路指導というところで使用しておりますので・・・
- 三塚委員 でしょう。だからもうちょっと踏み込まなきゃいけない時期じゃないの、こういうのって・・・、と思う。けど、どうなんだろうね。百瀬さんに答えろって無理な話で、教育長に答えてもらわなければいけない話かもしれないけど・・・。
- 百瀬課長 これとは別に高校改革アンケートというのを毎年やっておりまして、その中でいろんな項目で中学校、高校の生徒や保護者、教員にアンケートを取っておりますので、その中でいろんな内容、改革につきましては把握して、それを改善していくというようなことに努めております。今後もそんなことで引き続きやっていきたいと思っておりますけれども。
- 岡部委員 本当に三塚先生の言われるとおりでと思います。ちょっと本当に簡単なことなんですけど、桃花台学園のことで、佐藤先生と一度見させていただいて、そこでいろんなことを話をしている、南アルプスの人は来れないとか、そういうことを新聞紙上にいっぱい載せて広報をなさってくださいった件のことで、そのことで今回増えたのかななんて思ったりして、よかったかなというふうに思いました。

佐藤委員 内容の3番のその他のところの区分で、不詳という区分が前年の同期よりも増えていて、この不詳という枠の中は年ごとバラツキがあります、先ほど説明をいただいたんです。たまたまきつと病気の生徒さんとか、諸事情があるんだろうなとは思いますが、ちょっと数字が増えていて気になるんですけど。中学ではこういう不詳の場合、どんなふうに進路指導していくのか。その辺を教えてくださいたいです。

百瀬課長 全く不詳の内容がちょっとよく分からないので、この中に不登校の子が入っている場合もございましょうし、またこの病気療養中の子があらうかと思えますけども。それぞれ状況がちょっとよく把握できておりませんので何ともお答えのしようがございませんが、それぞれの状況によって各中学校では適切な指導がされているかとは思いますが。

【 了 知 】

〔 教育長閉会宣言 〕

以 上